

目次

.....
【1】 --- 教員コラム第 12 弾 第 7 回「冒険譚 三題」

副学長・分子生化学 / 奥田 司

.....
【2】 --- どこでも図書館！シボレス認証（学認）で利用できます

～「Leukemia & Lymphoma」も学外から読めます～

.....
【3】 --- 貴重書全文アーカイブに

『立齋外科發揮』『温疫論』『診脉口傳集』を追加

.....
【4】 --- リポジトリ「橘井」一時停止のお知らせ

.....
[Book Review] ・ ・ ・ 編集後記にかえて

【1】 --- 教員コラム第 12 弾 第 7 回「冒険譚 三題」

副学長・分子生化学 / 奥田 司

.....
私は幼い頃から、好んで、「冒険」を題材にした書物を読んでいたような気がする。今、PC の前に座っていることもあって、広辞苑ではなく、wikipedia で「冒険」と言う言葉を参照してみると、「冒険とは日常とかけ離れた状況の中で、なんらかの目的のために危険に満ちた体験の中に身を置くことである」とあった。簡潔で的を射た定義だと思う。しかし、個人的には、「冒険とは、時には意識されないかもしれないが、日常のなかにおいても行われているもの」も含み、かつ「”目的“ではなかったとしても、何らかの”発見“が得られる可能性の高い行動」でもあるという二点を付け加えたいと思う。このコラムでは私のお気に入りの「冒険譚」を三題挙げ、個人的な書評を書き加えることで、リレー筆者としての役割を果たしたい。

私が中学生の頃、最も強く私の心を捉えた冒険譚のひとつは「オデュッセイア（岩波書店）」であった。当時の学校の蔵書のなかに日本語訳のものが含まれていた。有名な古代ギリシアの詩人ホメロスによる叙事詩であり、トロイア戦争に参戦したギリシアのある島国の王であるオデュッセウスが紆余曲折を経て海路で故郷に帰還するまでを描いた物語である。物語の中でオデュッセウスには海神の怒りによって多くの試練が与えられるのであるが、神々の加護や他の人物たちとの協力にくわえ、智恵と力で海路を乗り切り、数多

くの波乱の末に、愛妻ペネロペとの再会を果たすという大団円に至る。トロイア戦争は実際にあったとされているが、オデュッセイアのストーリーの事実性はそれほど明らかにされていないように思う。それでもこの物語にはたくさんの奇想天外なエピソードが満ちていて飽きさせないものであった。また、現在の多くの小説や映画プロットのプロトタイプにもなっている。私が当時気に入っていたエピソードのひとつは物語序盤に出てくる「セイレーンの歌」のくだりであった。物語の中では、セイレーンは上半身が人間で下半身が鳥類と言われる怪物であり、ある島に集団で暮らしていると叙述される。そしてその歌声を聴いた船乗りは、抗いがたくその声に近づく進路を取ってしまい、この怪物の餌食となって生還できた人間は居ないのである。ところが、この物語の中でオデュッセウスが下した決断は幼い私を興奮させた。彼はセイレーンの島を回避するのではなく、その島の近傍を通り抜けるよう水夫達に指示を出すのである。ここでは、水夫達全員に蠟の耳栓をさせて、その歌声を聞かせないようにして航海の安全を確保した。一方、彼自身は耳栓をせず水夫達によってマストに縛りつけてもらって近海を通り抜け、安全海域に出た後に縄を解いて生還した。これによって彼はセイレーンの歌を聞いたにもかかわらず生存する最初の人類になるのである。絵空事ではあろうが、また、ある意味 不必要なチャレンジのような気もするが、この智恵と勇気に、幼い私は舌を巻いた。当たり前であるが、智恵と勇気に満ちた冒険によって人類はブレイクスルーを成し遂げるのである。私にとって「冒険と新規発見/体験とが密に関連している」という認識に触れる貴重な機会となった。

もう少し年齢が上った頃に気に入っていた冒険譚として、小澤征爾氏の「ボクの音楽武者修行（新潮文庫）」を挙げたい。初版の出版年は昭和 37 年であり、私が実際に読んだ時期よりもずいぶん古い。出版当時小澤氏は 26 歳であったとのことである。これは実に恐るべき紀行文であった。執筆者は日本を飛び出し、音楽を極めるために単身ヨーロッパをスクーターで旅行するのだ。そのとき彼はまだほとんど無名の音楽家の卵にすぎない。しかし彼は底抜けに明るく、きわめて楽天的である。各地の音楽祭やコンクールに乗り込んでコンペティションに参加し、また、躊躇無く有名・無名の音楽家たちの懐に飛び込んで、彼等と対等に交流する。私達は、その後、小澤氏が米国で大成功することを知っているからこそ、この本を楽しみながら読むことができるのだが、出版当時の読者らは相当にハラハラしつつページを繰ったのではないだろうか。資金的な援助があったのかもしれないが、それを差し引いても、26 歳で自分の才能を信じてコンクールで勝負し、そして邪気なく海外の音楽家と交流する小澤氏のなんと眩いことか。後年のあれほどの成功がなかったとしても、この書物はそれだけで素晴らしい若者の修行冒険記としての位置を確立したに違いない。学生が大学生活についての相談に来たときに、今後の医学学修の励ましとともに薦める書物のひとつとしている。若き日の小澤氏のように、自分に自信を持って屈託無く医学部での学修に邁進して欲しいと願ってのことである。古い本ではあるが、音

楽という切り口からであれば読んでくれるのではないかと思っただけのことだが、意は通じているだろうか。

三つ目の冒険譚として、利根川進氏との対談を立花隆氏がまとめた「精神と物質（文春文庫）」を挙げる。この本は、たまたま、最近の図書館メールでも取り上げられているようなので、内容については多くは語らないことにする。1987年の免疫グロブリン多様性解明でのノーベル賞受賞の内容や利根川氏の研究修行歴について対談形式で紹介する本であり、大変に読みやすい。講義関連の推薦文献のひとつとして学生に紹介しているが、読んでくれているだろうか。さすがに記載されている分子生物学についての記述の中には更新しなければいけない箇所も含まれてきているように思えるが、現在読んでも利根川氏の「知的冒険」のダイナミズムに胸が躍る。また、氏の何物にも影響を受けない自己の強さや精神の自由・闊達さに胸のすく思いで読み進めたことを思い出す。当時、成書としてまとまる前の、文藝春秋の記事類も目にしていたように思う。私にとってはちょうど大学院在籍中のことであり、当時、京大農学部近くの英会話教室で知り合った京大医学部の教員の方が、ちょうどバーゼル免疫研究所に留学されたこともあって、イタリアでの国際学会参加時に、あつかましくも思い切ってバーゼルを訪ねた思い出とリンクしている。その方にはこころよく免疫研を案内していただき、また研究所での利根川氏のご活躍の様子を教えていただくなど、たいへんお世話になった。くわえて、免疫研やロッシュ本社研究所で当時勤務されていた日本人研究者の方々とお話する機会もいただいて大いに刺激を受けた。なんと、そのうちの1名が高校の同級生であったというサプライズもあった。その京大の先生は後年医学部に戻られて教授職に就かれている。お近くにいらっしゃることもあって、今でも交流させていただいていることは私の大きな財産のひとつとなっている。こうしたいきさつがあって、この書物は、当時の私にとって、その直後の私なりの「冒険」を後押しする強い推進力となった。

私にとって印象深い三題の冒険譚について、個人的に過ぎるものになったかもしれないが、それぞれ随想を記述した。ここまで書いてきて、これらの物語がただ楽しくて読めば元気になるため好んでいただけのような気もしてきている。冒険によってしか得られないものがあるのは、きっと事実だろう。また、日常にも冒険は満ちている。ただし小説の中と異なって、現実にはリスクを最小化する努力を限界まで続けなくてはならない。そして、それでも冒険はつづいている。これらの本は何度も読み返すことになるだろう。

※過去の教員コラムは、[こちら](#)です。

【2】 --- どこでも図書館！シボレス認証（学認）で利用できます

～「Leukemia & Lymphoma」も学外から読めます～

.....

～自宅や出先から、大学の契約電子コンテンツに簡単アクセス～
このたび「Leukemia & Lymphoma」もシボレス認証でアクセス可能になりました。

認証の手順は

図書館 HP > 電子資料 > 学外から電子コンテンツを使う > シボレス(学認)認証
> [Leukemia & Lymphoma](#) に案内しています。

【3】 --- 貴重書全文アーカイブに

『立齋外科發揮』『温疫論』『診脉口傳集』を追加

.....

デジタルアーカイブ「[貴重書全文アーカイブ](#)」に新たに 3 誌追加しました。

・『立齋外科發揮 卷之 1-8』（4 巻）

著者 薛己（セツ・キ）は明の時代に江蘇省の医家に生まれました。幼少時より、外科・小児科の名医である父薛鎧より家学である医を学び脾臓を温補することの重要性を説いた温補学派の名医です。「外科心法」「内科摘要」など多くの著書があります。

・『温疫論』（2 巻）

・『診脉口傳集』（1 巻）

次回は『利攝蘭度人身窮理』『痘科鍵 卷之上・下』『蕉窓雑話 上・下』を予定しております。

【4】 --- リポジトリ「橘井」一時停止のお知らせ

.....

JAIRO Cloud のサーバーメンテナンスに伴い、以下のとおり「京都府立医科大学リポジトリ橘井」が一時利用できなくなります。御了承ください。

・ 停止期間：2018 年 12 月 3 日（月）17：00-19：00

[Book Review]

.....

槇佐知子「食べものは医薬『医心方』にみる四千年の知恵」(筑摩書房 1992)

著者は、医書の古典中の古典的名著とされる『医心方』の現代語全訳を成し遂げている。この書物では、食用篇(巻30)から、気軽に楽しめる身近な果物や野菜が紹介されていて、例えば「桃」の項では、「桃太郎」も登場するし、原産地である中国の高原地帯<桃源郷>も、また雛まつりを桃の節句というなど。「信じて服用しなければ薬にはならない」という医聖の教えや、科学的に立証される「病は気から」という言葉も紹介されていて読み応え充分。一読すれば『医心方』が身近な存在となるかもしれない。(第2閲覧室 490.9||M)(S.K.)

KPUM Library Booklog : <http://booklog.jp/users/kpumlib>

この本のページ : <https://booklog.jp/item/1/4480813187>

.....
図書館メール News 第 375 号 2018.11.22 発行 (隔週金曜日発行)

編集・発行 : 京都府立医科大学附属図書館

library@koto.kpu-m.ac.jp

<http://www.kpu-m.ac.jp/k/library/>

.....
(図書館メール News のバックナンバーはこちらから↓)

<http://www.kpu-m.ac.jp/k/library/webservice/mailnews.html>